

とダムに落ちこみ、何人かが死んでいくのを目の前で何回も見ている。

その後、中央サバクへ移動。幅二百メートルの大連河建設。ソ連が蒸気シャベルでトラックに積んできて、ダムを進めてゆくのだ。一人ジョレンを持ってトラック一台の土を五人で五十台がノルマ。もちろんふんどし一丁で裸、汗と土ほこりでぞろぞろ。収容所に帰って水泳をして体を洗ったものだ。

あとはつかれて、板のベッドにゴロ寝の状態が毎日。そのときに本部の鈴木准尉がラーゲルの中に来て、浜、お前、内地に帰れるぞと言ってくれた。そのときウソだと思ったが、営内に出てみると言われ、初めて本当だということがわかった。おかげで作業が一週間中止となり、ナホトカに行くことになった。大連河の目的は、天山山脈の水を利用して国営農場への水路をつくるための工事だった。

異国からの絶叫

和歌山県 木下正夫

忘れもしない昭和二十年九月一日、旧満州国、横道河子が最後の集結地だった。武器弾薬と訣別、武装解除されて、その後海林に約十日間、幕舎生活をさせられた。その間、北は千島から南は北朝鮮方面から、各部隊が集結しているといううわさであった。

ある日、ソ連の大隊長から、お前たちはこれから日本へ帰れるのだから、まず一選抜の編成すること、みんな半信半疑のまま、隊列に加わり、まず千五百人が行軍を始めた。これから果てしなき旅となることも知らずに。

広野には戦闘の傷あとも生々しく、焼野が原、死体が各所に散乱している。やがて日がたつにつれて疲労が重なり、落伍者が出るが、それには目もくれず隊列は進む。置いてけぼりの落伍者は、多分野たれ死したのだろ

う。監視兵も頓着なし、途中のどが乾いて溝へ水を汲みに行けば、逃亡するものと思って銃殺されたこともあった。それを道路のわきに埋めての行軍が続いた。

それはそれはとても苦しい行軍で、雨が降ろうが夜行軍、宿営は大豆畑か草原。飯を炊くにも薪がないので、行軍途中で木切れを拾い歩くのだが、それも思うようにあるものではない。小休止もなかなかやってくれない。宿営も薪のない所でするのだ。

やがて国境の町、綏芬河に、ここに住んだ白系露人はもぬけの殻で、散り散りに消え去り、だれもない。国境とは名ばかりで、日本側の分所とソ連の分所との間の道路上に青線が引かれているだけである。この場所は、かつてソ連との戦闘のとき、戦車が突進して来て今の中国孤児たちが悪戦苦闘した所だと聞いた。

やがて国境を過ぎるころ、夜空には我々の行方を指すかのように流れ星が北へ飛んだ。磁石を見れば北へ方角を示している。やっぱりだまされたぞ、日本に帰れるどころか、ソ連領だ、だれ言うもなく抑留されるのだ、あきらめるより仕方がない、もう駄目だ、暗い気持ちで重

い足を引きずり歩いた。

やがて収容所らしいものが間近に見えてきた。後で知ったことであるが、着いた所は伐採のための収容所であった。厳重な鉄条網に囲まれ、籠の鳥同様、木の切り株だけで、兵舎どころか何もない、だれしもただ茫然とするばかり。この先が思いやられる、あきれるよりない。

地面に枯れ草を敷き、毛布にくるみ、着の身着のまま抱き合うように寝るのだが、夜中に用たしに行くと、寝る所がなくなつて、朝まで起きていなければならぬ幕舎生活が始まった。前途は全く暗いが、隊長を中心に日本人としてあくまで深く最後を遂げる心構えはしておくようにとのことで、一同決意して入所したわけだ。

しかし、幾重にも張りめぐらされた鉄条網に近寄れば、逃亡すると思うのか銃撃される。雪が降って来たのに武装解除以来の夏服だ。零下三十度になったときでもそのままだった。とてもやり切れるものではない。日がつにつれて冷えこみとシラミに悩まされ、俘虜の身をむしばんでゆく。

食糧は、満州からの戦利品の小豆を主とした少量の飯に生練ひと切れ、作業は重労働の伐採だ。飢えと寒さの毎日、例えようもないそんな悪条件下でも、与えられたノルマは果たさなければならなかった。

山に入れば深い雪の中での作業、木の根元の雪除け作業だけでも大変で、白樺、紅葉の堅木ばかり、直径の太いものを切らなければ能率が上がり、ノルマ達成は容易でなかった。

このような難作業の連続であったが、まず自分たちの宿舎を建てなければということで、生木であるが、どうやら建てる事ができた。しかし、なに分にも生木であるので、水分が出るし、丸太の上の寝起きであり、薄暗い悪環境の上に、日常は風呂とてなく、洗面器に少量の湯で体を洗うだけが月に一回あるかなしの状態で、頭の髪は伸びるにまかせ、不潔な体にシラミが増えるばかりだ。

飢えと寒さ、冷えの上に、小豆食、下痢と発熱、細りゆく体をシラミが貴重な血の一滴を吸い取ってゆくのだ。つりゆくソ連の冬將軍の冷えこみの中で、発熱患

者が続発して、朝には冷たくなって、幾多の同志が倒れてゆく。

それでも反抗することができなかった。雪で胸まで漬かる山の難作業、とても容易ではない。大木の根倒し、途中、木がさける。そんなときに切り口がねじけて、逃げる間もなくアッと言う間に倒れる大木の下敷きになって死んでいった戦友の姿が、今もこの目の底に焼きついている。

悪い環境の宿舎、飢えと寒さ、シラミ、不足する食糧の質と量、すべてが人間生活の極限を通りこした待遇の中で、毎日のように幾多の戦友が冷たくなっていったのが、ソ連強制抑留の実感であったと言って過言でない。私は言いたい。もし反抗したとすれば、たちまち食を減らされて、結果は我々自身のこととして思い知らされるのが常であった。

死んでいった友の分まで頑張らなければならない、生きる望みだけは捨ててはいけなさと心に言い聞かせ、齒をくいしばっての毎日、これが人間としての生活であろうかと、強制労働のノルマ作業の苦しみをいまさらに思

う。山の作業は、冬は雪との闘いであり、夏は山ダニとの闘いであったとも言える。

ある日、健康診断があった。ドクトルが木でつくったラッパ型の聴診器を私たちの胸に当て、手の甲の皮を引っ張り、痛いかと聞く。栄養失調の者は病院に運ばれるのだが、その病院とて満足なものは一つもなく、非常な悪環境であった。貨車で運ばれるのだが、凍りついた貨車の中で息を引き取った死者の名前も記録されずに、丸裸にして草原に放り出された。何ほ何でも無茶な仕打ちであると私は思ったのが、当時の実感だった。

病院そのものも環境がまことに悪く、食事も伐採地の収容所と同じで、小豆飯と生鯉ひと切れで、その飯も、洗ったことのない食器で分配されるし、衛生的観念がなく、赤痢や発疹チブスの患者から患者へ、その他の患者からまた健康な者に限らず、そんな区分一切わきまえずの状態であった。

これでは続々と死人が出るのは当然で、それほど当時のソ連は、すべてに不足していたと言える。よい水のなかったことも原因であったといえる。夜、患者たちは

のどが乾くので、炊事の水汲み用の桶にツララができるので、取りに行く。食べる物といえば、主食が小豆だから、下痢患者が増えるばかりだった。

このように、収容所でも病院でも、常に自分の命をどのように保ってゆくかということが最大の関心事であった。夕陽が沈む、雁が飛んで行く。雁でさえねぐらに帰るのに、我々はいつの日にか母の国日本に帰れるのか、日ごと望郷の念にかられる。

その後、私たちは他の収容所に移動され、各地からの俘虜の混成の作業隊となった。橋架けの作業場だった。宿舎から持って来た飯も凍りついて食べられず、暖めねば食べられずで、たき火すれば歩哨が消してしまう。こんなことがたびたびのこと。持って帰った昼飯を雑炊にして食べるのだが、少量の食事でも食べなければ生命がもたない。腹が空いていると眠るにも眠れないで、ますます体力の消耗となる。春先になって青草の芽の出るころは、ヨモギを持ち帰って塩汁のスープの中に入れて湯がく。これなども生活の知恵であるが、歩哨は切ない私たちの願いの野草さえ取らせてくれなかった。

そのころ与えられるようになった燕麦の飯を分配するのに、ドクトルが立ち会いで作業のパーセントで配分される。作業によって重労働の者のパーセントが低く、軽作業で町の溝さらえの方がパーセントが高い。これではたまったものではない。日本人同志の不満がつのり、ソ連側に平等に食べさせよと要求しても、受けつけようとはしない。スターリンが命令していることだという。彼らの頭の堅さにもあきれて、ものも言えない。そこで私たちが雪の夜、ストライキすると言ったら、全員吹雪の中へ放り出され、何時間も外に立たされたこともあった。随分いじめられたが、これ以上反抗もできず、我慢するよりなかった。

飢えるということの、集団生活の中での人間の餓鬼道ほど怖いものはない。汚れた根性があらわとなり、戦友であるということすら忘れて、畜生道そのままの姿となるものだ。これ以来、平等に分配するために、私製の計量器をつくり、刻み煙草の葉などはクジで分けることになった。ソ連という国は流石に労働の国で、スローガンどおり「働かざれば食うべからず」を思い知らされた感

もある。

これも一つのなさけない体験であるが、ある日、鉄道の雪除けのときに、凍って黒くなった馬鈴薯を拾って持ち帰って喜んだが、次の機会にも同様のうれしきで持ち帰り、飯盒で湯がいて、香りが違い、馬糞のコチコチに凍ったものであったことなど、我なりに哀れな執着といえよう。

昭和二十二年ころからダモイの列車が通るようになり、鉄道のそばで作業しているとき、列車の窓から紙包みの丸めたものを投げてきたくれた。「一足先に帰るが、もう少しの我慢だ、頑張れよ」と言ってくれていたが、悔しいいっぱい、その夜はソ連の将校に直談判して、俺達のダモイはいつなのかと話してみたが、口先だけで、ダモイどころか、そんなことの後はすぐに他の収容所に移されてしまうのが積の山だった。

今度は砂糖工場と石炭の貨車降ろし、砂糖はビートという赤大根でつくられる。現場で食べる分には麻袋に穴を開けて盗み食いのだが、係員の目が厳しくて、持ち帰りはできなかった。他の場所からも貨車で砂糖が運

ばれて来るが、そのときの付き添いの歩哨は、やってはいけないことを捕虜の我々に命じて、袋に砂糖を取らすのを役得にしていたようであった。工場の門衛は女で、銃を持っていたから、工場内ではできないことであらう。

ちよつとうれしかったことだが、ある日、町の作業を終え、溝でスコップを洗っていると、通りがかりのマダムが、どうしたわけか刻み煙草のマホルカをヤポンにあげるというて、くれた。このようなことは今までになかった。ソ連人の情けであり、思いやりであった。そのマダムの後姿にありがたさいっぱいの気持ちで、手を合わして見送ったものだ。どこの国でも、悪い人ばかりではない、よい人もいるものだ。

あるとき、魚選別の作業をやらされた。マス、サケの選別で、食べ物のところは、その場で食べれば許されるが、持って帰るのは厳しくて難しい。それでも帽子の中や外套の背中に入れて帰るが、門衛の日直将校に半分は取られるのが落ちで、後の半分は炊事場へ納めなければならなくなってしまうことが多々であったが、この仕事

のときは我々の笑いどきであったとも言えた。

しかし、当時の私たちにとっては、苦しい苦しい毎日が過ぎていった。その後、また別の伐採の収容所に移された。そこは元囚人たちの住んでいた建物であつたらしい。ここもやはり環境が最悪で、古びた建物の天井からも柱にも床にも、家ダニがウヨウヨして、とても住まいのできるような状態でない。床に坐っている事もできず、休むにも外で毛布にくるみ寝るのだが、夜露にぬれて、砂ぼこり、山には山ダニがいて、夜は南京虫で責められどうしの毎日だった。

秋口の山は、腐れ木にしめじが生える。土に生えたきのこの見分け方を知っていたらよいのだが、知らないままに、空腹のあまり毒きのこで死んでいった静岡県の人を思い出す。作業からの帰り道、草むした草葉の陰にたくさん墓標が立っていた。これらも飢えと寒さと、ひどい環境の中でむしばまれ散っていった友よ、私は常に絶対に異国の土になるまい、祖国日本の土を踏むまではと話して来たことも、すべて無情の風に吹かれていったのではないか、俺たちはお前たちの分まで生き伸びなければ

ばと肝に銘じながら、頭を垂れるのだった。

毎日の生活にも、とられてしまった時計が戻るわけではなし、ほど合いで時を過ごしてゆくよりない。やがて回ってくる革命記念日も、私たちには何ということはない。こんな日に限って貨車が来る。すぐに作業に放り出され、ソ連のお祭もあったものではない。

その後の作業は山の収容所に、ある日は農場へ、道路構築に、れんが工場へ、建築作業に、炭鉱へ、橋の作業へと狩り出された。何といっても伐採は命がけの作業、

朝二人に一本の鋸を渡され出て行くのだが、切れない鋸と衰弱した相棒が当たれば、ノルマだけかせぐことが大変だ。ただただ気力、気力で働かねばならない。

また、伐採した原木を手で小引きして薪に、そしてその薪を山の麓の駅の貨車積みだ。「ヨイトマケ」の掛け声でみんなが心を合わせてやらなければ、体の弱った者もかなりいるので、仕事もスムーズに進まないのだ。貨車が入れば、時間内に積み込まなければならぬ。難作業で積み残しは絶対に許されない。たまったものではない。

山からの木は家庭でたくべチカ用として白樺と紅葉の堅木ばかり、松は建材用ということ。積み込みの駅には電燈ひとつない暗やみ、タイ松の明りで作業するのだが、積み込みの薪が近い車両であればよいが、何百メートルも離れた車両に積み込むのは大変だ。一々担いで運び入れなければならぬ。それがすべて協同作業であるので、凍りついた渡し板がすべって、一人が倒れば八人が倒れてしまう。

もうダモイも近いだろうと思いつつも、繰り返して繰り返してだまされ続けた我々に対し、隊長は、お前たちはどんな苦しみも腹が立つときでも、ソ連に反抗するな、それは必ず食物でシッペ返されて減らされるからだ、我慢しろといつもさとされ、いずれ日の当たる日も来るだろうからと言われるのだが、気力だけはあるのだが、だれしも体力の消耗は何ともしがたい状態になりつつあった。

その後、農場と伐採の収容所に移動されて、山の組は九州の福岡部隊で、私たちは農場の方だった。農場といっても広い平原での馬鈴薯掘りで、九月ころにはもう

そろそろ土は凍る。掘れなくなるまで続けるのだが、冷たくてたまらない。それでもわらむしろの下に忍ばせて持ち帰って、同僚たちと食べる塩味の馬鈴薯の味は、今も忘れられない。

その後は、また冬將軍の雪との闘いである。そのころからソ連側は民主主義教育が始められた。私たちのなかから指導者を五人選任して、ナホトカへ講習に派遣されたようである。一か月の講習を受けた者から、夜は共產主義や共産党の講義が毎晩のように行われた。作業の往復には必ず革命歌を歌う毎日となった。

ソ連側の手段であるとは知りながら、ノルマ達成には一応の成果となったことは事実であった。やらなければつるし上げされる洗脳教育は、ますます活発になっていった。私たちのいたソ連のどの土地においても、文化の後れた当時の一つ一つに偉大な足跡として、汗と油と涙の結晶として残されていたことはまぎれもない事実であると言える。

昭和二十四年ころ、四年の歳月を経ているので自分でもわからなかったのであるが、突然耳よりな情報が流れ

た。我々にも待ちに待ったダモイの命令があったのだ。小踊りして装具の整理をしたが、夕暮れどきの山の部隊では何の情報もなく、ソ連側の間違いで、恨めしいやら、悔しいやらであった。

やっとダモイ命令が来ても、だまされ続けた私たちに本当のこととは思えず、半信半疑のままでもシベリア鉄道の人となり、バイカル湖を左に見てウラルも越え、やっと待ち焦がれたナホトカという港にたどり着いた。しかし、それから約一年近く帰国の順番待ちの山の伐採だった。

何故の時間待ちなのかわからない。ただ憶測だけの不安な生活を、ナホトカまで来てからも送らなければならなかった私たちであった。日本からの配給が少ないからだということであるが、信じられないままに過酷な労働を続けて、特に精神的な疲れに尽き果てようとした終戦四年後の十月、やっと乗船のときが来た。

安らかに眠れ友よ、さらば、後髪を引かれながら乗船であった。十月の日本海はシケていた。ソ連の将校の我が名を叫ぶ声を聞き洩らさじと、耳をすまして待つ。順

番がついに來たうれしきの余り、タラップをどうして登ったか記憶がない。ナホトカの港では赤旗で見送られたように思う。だまされどうした幾年瀬、飢えと寒さと過酷な労働の日々、祖国日本への帰り道は余りにも遠かった。

国敗れて俘虜となり、恥ずかしき思いで帰った。しかし、これはまことか、狐にでもだまされているようだ。またソ連から引き戻されるのではないか、復員者にとつて今も、また生涯忘れることのできない悪夢だと言うべき体験であろう。

ああ、懐かしく忘れがたき祖国よ、故郷よ、我れ生まれし日本よ、このつたなき俘虜体験の叫びを子孫への申し伝えとして残しておきたい。皆さまへの祈りとしてペンを終わる。

ソ連抑留苦闘記

和歌山県 入山 敏一

昭和二十年九月初旬、本隊はチチハル兵器廠第二六三五部隊に終結。十月中旬、作業第十三大隊江口佐の指揮下に入り、ハイラルより満州里へ。大休止二、三日の後、幾日かを経てトオリンスカヤという所についた。もちろんその当時は知るよしもない地名、一面雪の野原で凍っている山の中で、真夜中のことであつた。

宿舎一つあるでなし、溝が掘られて薪が投げ込まれていた。ソ連兵が来て火をつけて溝の両側で野宿だ。寒くて寒くて寝られたものではない。外気は氷点下十度だ。不寝番が交代で薪をたき暖とす。翌朝、健康な者は伐採、身体の弱い者はソ連兵の言うがままに宿舎づくりという事になった。

これがシベリア生活の始まりとなり、それから後のことは、推して知るべしである。毎日二人一組で「ノルマ